震災と向き合って

庄子 陽子

宮城県

2011年３月11日東北を襲った大震災。死者15,843人、行方不明3,469人。戦後最大の自然災害だった。宮城県のろうあ者の被害は2012年１月現在確認されているもので14人の死亡、手話関係者を含め約50家族が仮設住宅で生活をしている。

かつて庄子陽子さんの祖母が暮らしていた十三浜（じゅうさんはま）は、津波で跡形もない。近くの小学校、役場は鉄骨が無残に残るばかりだ。

十三浜は津波で何もかもが流されてしまった

笑顔がみんなを元気にする

2011年３月11日、庄子さんは地震の後宮城県ろうあ協会に駆けつけた。会長の小泉正壽（しょうじゅ）さん、宮通研事務局長の及川麻衣子さんと落ち合い、その次の日から毎日事務所に詰めてろうあ者や手話通訳者等の安否確認を始めた。

「東日本大震災聴覚障害者救援宮城本部」を県ろうあ協会、宮通研で立ち上げた（現在は難聴協会(※)等を含む５団体で構成）。名簿を作り、避難所にろうあ者をたずね、要望を聞き、対処するしごとが始まった。宮城本部長は県ろう協の小泉会長が、副本部長は宮通研の宮澤典子会長（現在は難聴協会の松本隆一会長）が担当、集まれる仲間が限られる中で、安否確認、物資支援班、相談ケア班、ボランティア班、行動隊など必要に応じて即決即断の支援活動を行って

新しいみみサポの事務所

小泉さんと８月から二人三脚でやってきた

ボランティアさんが事務所の手伝いに

ろうあ者相談員の田脇博子さんと

石巻市、高台から静かなる海を見る

きた。

県ろうあ協会の小泉会長は、その日から一日も休まず、本部に通い、仮設住宅のろうあ者を訪ね、活動を牽引してきた。本部の核となる事務局は、宮通研から時間を追って宮澤会長、佐藤可奈子さん、宮東優子さんと繋がれてゆき、８月、ボランティア班の班長をしていた庄子さんが引き継いだ。

2012年１月４日から県の委託事業として「みみサポみやぎ」(みやぎ被災聴覚障害者情報支援センター)が仙台市宮城野区に開設された。「救援宮城本部」の次の一手でもある。「情報、相談、つながり」をキーワードに、手話通訳士２人、要約筆記奉仕員、聴覚障害者の計４人のスタッフが、被災した聴覚障害者の生活再建に向けた相談支援や情報の発信を行う。

震災後、全国から通訳者が支援に入った地域では手話通訳の重要性が行政に認識され、亘理町、名取市では週一での設置通訳が実現した。

（※）特定非営利活動法人みやぎ・せんだい中途失聴難聴者協会

みみサポみやぎのメンバー、
左から福元、庄子、横沢、江連の４人

石巻市を訪問、福祉担当と懇談

母と話す時間は仕事を忘れて

健康管理部長は同級生

「みみサポみやぎが将来、宮城県の聴覚障害者情報提供施設に発展してゆくような形になれば」と今後の展望について庄子さんは語る。

庄子家に震災直後、12人が「避難生活」を送った。食事作りやお世話に奮闘したのは母親の幸子さん。無理がたたって３月下旬に脳梗塞で倒れる。その後、治療の甲斐あって全快。母親との時間は、激務の陽子さんのほっこりする瞬間である。

陽子さんの健康管理部長を務めるのは高校時代の友人、村上房子さん。村上さんのなごみ整骨院に来て治療中、陽子さんは爆睡していることが多いという。

久しぶりに、救援宮城本部のボランティアのメンバーが交流会を開いた。皆、震災と向き合って大変な時間を共有してきただけに、話はつきない。そしてメンバーの表情は明るい。聴覚障害者福祉が震災復興をきっかけに、さらに飛躍する予感を秘める。

写真・文　豆塚　猛

救援宮城本部のボランティアが久しぶりに集まって交流、これからの宮城の元気が見える